

## 「都市とユダヤ」試論

今井夏彦

### I

現代において、人間が個人として「自我」を持ちうる可能性についての問題は、いうまでもなく今日の状況に関わる根本的な問題である。中世以後のヨーロッパ思想において、個人主義の発展が個人の帰属すべき場所を見失わせ、その状態が現在の我々の世界にまで続いているといえよう。それは、いいかえれば、「自分」と自分の「生」との距離であり、自分の生の意味を見い出そうとするときに生ずるものである。そして求めれば求めるほど遠のいていき、不明瞭なものとなる。

帰属感を失った「自己」は、あるいは「伝統」に傾き、あるいは「共同体」に身をよせる。だが、完全にひとつの共同体としての組織の一員となってしまう時、「自己」を自らの運命として引き受ける者は、もはや真の意味での「自我」をもつ者ではない。つまり、今日においても我々が「アイデンティティー」を求めようとするなら、それは「個」と「集団」との関連のなかに求められるべきである。「誠実とは、単にそれが個人の美德として最高のものであるというだけでは不十分であって、そこに個人の社会に対する責任という積極的な観念が含まれなければならない。」<sup>(1)</sup>

Ihab Hassan の “The Radical Innocence” によれば、「現代小説のヒーローは、結局は、われわれの時代の空虚と変転にもめげず、人間の生命感を肯定したいというおさえがたい欲求心を表現するもののように思え、」そして「ヒーローは、その虚構の世界に生きるかぎり、われわれが小説として考えているあの想像上の対立する形態の中で、自我と世界の融和をは

かるのである<sup>(2)</sup>。」彼は、そのヒーローの根源として、ドストエフスキーの“地下生活者の手記”の主人公を認める。「ドストエフスキーの描いたいわゆる『虫(インセクト)』が、彼の存在を認めさせない横柄な士官と不名誉にも衝突することによってはじめて自らのアイデンティティー確立することができるということは重要ではない。重要なのは、その認識を強要するのは彼自身だということである。これが自由というものだ<sup>(3)</sup>。」

果たして、あの「アメリカの夢」という神話は終わってしまったのであろうか。新大陸に自由と希望の国を建設し、すでに地理上のフロンティアは消滅してしまった現在においても、それはどうしても死のうとはせずに、人々の心の中に生きているのではないだろうか。かれらは「旅する国民」である。常に開拓という名の旅をしている。自らに移動を強制することが、彼れらの根源的なテーマである。たしかに、ジョン・F・ケネディの「ニュー・フロンティア」というかけ声とはうらはらに、第二次大戦、朝鮮戦争、冷戦、ベトナム戦争とはてしなく続く戦争のなかに、かれらはフロンティアへの想像力をすっかり失ってしまったように見えるが、少なくともニューヨークのような大都市において、「移動」という形でそれは在りつづけているように思える。

1950年代のアメリカで、James Baldwin, Ralph Ellison 等と並び、J. D. Salinger, Saul Bellow, Bernard Malamud, Norman Mailer, Philip Roth といったユダヤ系作家達が一時期を画したことは周知の事実である。かれらは、ユダヤ人というマイノリティ・グループの被害者としての疎外された「生」を主題にした作品を書いた。かれらの描く主人公の、社会的には同化されながらも、精神的に疎外されている状況が、現在の我々の立場に近かったことが、その作品が多く読まれた原因である。

60年代に入ると、しだいに弱者であるはずの主人公達が疎外を武器にして強者になってしまったため、その新鮮さを失い、当初のインパクトを持たなくなった。つまり、かれらの疎外が普遍化され、現代人の疎外のなかにとけこんでしまったのである。しかし、だからといってその重要性が失われたことにはならないだろう。

II

ユダヤ人としての特殊性が普遍性をもつというこの間の事情は、安部公房の“内なる辺境”によく説明されていると思われるので、ここにその要約を試みてみる<sup>(4)</sup>。

数百万年前に、われらの祖先である最初の先行人類の、二足歩行をするアウストラロピテクスが出現した。その後百万年ほどして、別種の二足歩行属であるパラントロプスが現れる。だが、後者は急速に絶滅してしまう。「生きのびたアウトラロピテクスは、そのまま進化をつづけ、五十万年ほど前になると、ついにホモ・エレクトス（直立原人）として、われら人類と同じ、ホモを名乗るにいたるのである。」

では、なぜこの両者のうち一方は滅び一方は進化したのか。その理由としては、滅亡したものは草食、残ったものは、「肉食という食習慣の大異変を見」たからである。「正統と異端に分けるとすれば、亡び去ったパラントロプスこそ、原始類人猿からの正統な子孫であり、わが祖先アウストラロピテクスは、あいにく同胞の知らぬ生肉の味をおぼえてしまった、非道の異端であったというわけだ。」こうしてホモ・エレクトスという異端の息子たちは、狩人として、氷河をのぞく、全世界のいたる所にひろがって行く。従って、「パラントロプスとともに亡びたのは、単なる社会性や非暴力ばかりではなく、定着しか知らぬあまりにも保守的な社会だったということだ。そして、そこからはみ出した異端の群だけが、人類の歴史に向かって急進撃を開始したのである。この異端性と、移動本能こそ、われわれの心臓に深く刻み込まれた、未来へのパスポートなのかもしれないのだ。」

だがこの移動本能は、「母なる大地」という観念と対立する。あの異端の子孫も、五千年以上という、長い農耕の歴史をすでに持ってしまっている。「農民を社会の土台と考える郷土神話が、人々の心臓を芯まで染めあ

げてしまった」のである。

一方、現代の全て定着国家によって分割された地球において、移動本能が入りこめる隙間は、わずかに都市の広場しかない。「考えてみると、昔から、都市には内側の辺境といったおもむきがあり、家出人、犯罪人などが、好んで隠れ家に使ったものである。

「まして、今日、われわれの住む大都市では、たぶん、世界大戦という、全空間の同時共鳴の余韻がまだ響きつづけているためもあるだろう。時間の共有感覚はすでに日常のことである。……学生たちが、世界中の都市で申し合わせたような行動を起こしても、誰一人その空間的偶然性に驚いたりする者はいない。誰もが同時代の感覚を、いつか知らずに身につけてしまっていたからだ。育ちすぎた国境が、内部で辺境の卵を孵化させてしまったらしいのだ。」

例えばここで、カフカとトルストイを比較してみると、

〈カフカは、ユダヤ人の心で書いたが、それを超えて人類の魂に呼び掛けるものを持っていた。〉

〈トルストイは、ロシア人の心で書いたが、それを超えて人類の魂に呼び掛けるものを持っていた。〉

「特殊を通じて普遍へ」という定式において、両者の「特殊」という言葉の内容には、何か質的な相違がある。やはり、「トルストイが終極的にたどりついた、『善き人』の象徴も、けっきょくは母なる大地への祈りを知った『善き農民』にほかならなかったわけである。」そして、どうも「すべての近代国家が、その形成の歴史的背景に、聖なる大地の記憶を抱きつづけている」ように思われる。

概知のように、ユダヤ人の都市的性格は、歴史的な裏付けをもった事実であるが、その都市からも、「制限から、差別へ、差別から、拒絶へと」しめだされてゆく。

それでは、なぜユダヤ人が追い立てられるのか、「犠牲の羊」に選ばれるのか。

「答えは一つしかない。ユダヤ人とは、土地に定着できなかった者のこ

とである。土地に結びつけなかった者が、ユダヤ人だったのだ。言葉を変えれば、『本物の国民』たることが、本来的に不可能な存在だったのだ。……どうやら、本物というやつの正体は、領土という空間で代表される国家の条件ということになりそうだ。だから、本物の国民が、農民的な姿をとって現れもするのだろう。そして、贋の国民は、都市にむかって追い出される。現実には、都市こそ国家の中核なのだが、この本物という尺度にとって、都市はたかだか内なる辺境にしかすぎないのだ。それならユダヤ的なるものは、人種としてのユダヤ人の有無にかかわらず、国境に閉ざされ内に都市をかかえた国家の宿命として、たえず無限に再生産されつづけても仕方がない。」

「そこで国家は、かって辺境の『異端』と闘い、国境線を守り抜いたように、こんどは内なる辺境（移動社会）の『異端』にむかって、正統擁護の闘いを開始しなければならなくなった。……ユダヤ系作家、亡命作家が、いまや無視できない影響を世界に持ちはじめたというこの事実も、『正統信仰』という国家の大義名分に、そろそろ限界が来はじめたことを暗示している。かって、外からの移動民族の襲来が、農耕国家の空間的個有性を破壊して、国境を超えた同時代的感覚を持ち込み、定着にともなう停滞に新しい跳躍の機会を与えてくれたように、今席は都市という内部の辺境から、国境を破壊する軍勢が立ち現れようとしているのかもしれない。農家の思想に変わって、都市的な同時代性に『正統』を認める、辺境派の軍勢が……。」

「ユダヤ的なるものは、イスラエ尔的なものではない。イスラエル人になら、二千年の受難の歴史と栄光を書いて、正統主義者の仲間入りも可能だろうが、あらゆる歴史への参加を拒まれたユダヤ系作家に出来るのは、ただ今日—永遠の現在—について書くことだけである。」

以上、引用が少々長くなってしまったが、この「内なる辺境」という指標を導入することによって、「ユダヤ的なもの」と都市との深いつながりがかなりはっきりしてくるようになったと思われる。

あるいはまた、ヨーロッパの都市は、18、19世紀に城壁をこわし、そのため中心となる核を失い、周辺に闇ができた、とよく言われるが、今では、その「闇」が、刻々と都市の内部にまで拡がりつつあるのではないだろうか。そして都市は、「いくつもの閉め忘れた扉を残して、ますます迷路じみってくる<sup>(5)</sup>。」

やはり同じ安部公房の、依頼人の蒸発した夫を探すうちに、その調査員自らが自己のアイデンティティーを見失ってしまうという小説“燃えつきた地図”は、次のような逆説のエピグラフで始まっている。

都会——閉ざされた無限。けっして迷うことのない迷路。すべての区画に、そっくり同じ番地がふられた、君だけの地図。

だから君は、道を見失っても、迷うことは出来ないのだ。

迷路とは、あらゆるところに出口とおぼしき扉がありながら、はたしてその扉が、外へ通づるのか内へ通づるのか、けっしてわからないような空間であり、あたかも vicious circle をたどるかのごとく、外へ出たつもりが、逆に更に一步「闇」の奥深い方へ近づいてしまうような空間である。

### III

この、都市の内部での単なる歩みが、終りのない円環運動、無限の彷徨へつながるといふ図式に近いイメージは、すでに T.S. Eliot の“The Waste Land”の第一部“The Burial of the Dead”に見られる。

Madame Sosostris, famous clairvoyante,  
Had a bad cold, nevertheless  
Is known to be the wisest woman in Europe,  
With a wicked pack of cards, Here, said she,  
Is your card, the drowned Phoenician Sailor,  
(Those are pearls that were his eyes. Look!)

Here is Belladonna, the Lady of the Rocks,  
The lady of situations.  
Here is the man with three staves, and here the Wheel  
And here is the one-eyed merchant, and this card,  
Which is blank, is something he carries on his back,  
Which I am forbidden to see. I do not find  
The Hanged Man. Fear death by water.  
I see crowds of people, walking round in a ring.  
Thank you. If you see dear Mrs. Equitone,  
Tell her I bring the horoscope myself:  
One must to be so careful these days.

Unreal City.  
Under the brown fog of a winter dawn,  
A crowd flowed over London Bridge, so many,  
I had not thought death had undone so many.  
Sighs, short and infrequent, were exhaled,  
And each man fixed his eyes before his feet.  
Flowed up the hill and down King William Street,  
To where Saint Mary Woolnoth kept the hours  
With a dead sound on the final stroke of nine.  
.....

“The Burid of the Dead”「死者の埋葬」の第三連において、女占い師であるソストリス夫人は、それぞれ、「水死したフェニキアの水夫」、「石女のベラドンナ」、「三叉の錫を持つ男」、「車の輪」、「片目の商人」、「白紙のカード」などを、次々と出してくる。すると彼女の頭に都市の映像が浮かび、56行目 “I see crowds of people, walking round in a ring. (輪になって歩く人の群れが見える) ののである。

つづく第四連では、

まぼろしの都市  
冬の夜明け、茶色の霧をくぐって  
大ぜいの群衆がロンドン橋の上を流れて行った。  
死はあんなに大ぜいの人々を滅ぼしたのか。

---

思い出したように短いため息をもらしなら、  
みんな自分の足もとを見つめていた。  
坂を上り、キング・ウィリアム街を下って行くと、  
セント・メアリー・ウルノス寺の、九時を打ち終る  
鐘の音が死んだように漂って来た。

(福田陸太郎訳)

この詩の背後に流れている「死」と「再生」のイメージはともかくとして、エリオットは、第一次大戦後の荒廃したロンドンを、Unreal(まぼろしの)と言い切ることで、すでにロンドンという都市に先験的に「闇」を読みとっていたのではないか。それは、次の行の winter dawn(冬の夜明け)の Brown fog(茶色い霧)という表現によって、さらに強く暗示されている。人々は、flowed(流れる)、つまり放浪することを余儀無くされ、walking round in a ring(輪になって歩く)、つまり永遠につきることのない無限の彷徨を強いられるわけである。これは、「闇」というかたちの都市以外のなにものでもない。と同時に、その都市はとてつもない虚無を内包した閉鎖的な都市であり、それは、そのまま閉ざされた「精神空間」とひびきあう。

#### IV

ヨーロッパの都市では、城壁がこわされその周辺に闇ができた。だが、そのパターンはアメリカには通用しない。アメリカの都市には城壁などなかった。伝統と歴史のないところに、いきなり巨大都市が出現した。という事は、始めからすべてが中心であり、それをひっくり返すと全部闇になるという逆説の可能性をもつ。その意味では、ニューヨークという都市は秩序のない、混沌とした闇である。いわば、「倒錯した都市」である。

例えば、サリンジャーの“The Catcher in the Rye”の主人公であるホールデン・コールフィールドは、ペンシー高校を脱け出て、妹のフィービーに会うためにニューヨークに出てくる。



It Was lousy in the park. It wasn't too cold, but the sun still wasn't out, and there didn't look like there was anything in the park except dog crap and globs of spit and cigar butts from old men, and the benches all looked like they'd be wet if you sat down on them. It made you depressed, and every once in a while, for no reason, you got goose-flesh while you walked. It didn't seem at all like Christmas was coming soon. It didn't seem like anything was coming<sup>(5)</sup>

「公園はひどかった。それほど寒くはなかったけど、太陽はやはり出ていなくて、公園の中は、犬の糞と年寄りの捨てたタバコの吸いがらと痰ばかりのような感じで、ベンチも腰かけると濡れそうな気がした。ほんとに参っちゃんだ。ときどき、どういうわけか、歩いているととりはだが立ってきた。もうすぐクリスマスが来るなんていう気は全々しない。クリスマスばかりでなく、何かがやって来るという気配も全々なかった。」

ホールデンは、ニューヨークで、性倒錯者、バーの中の男をあさる女、コール・ガール、ゆすりの男などのあいだをさまよう。彼は、都市の荒廃した現実にはやおうなく直面する。しかし、彼が見ているものは、上に挙げた例からもわかるように、単なる描写ではない。彼の心に映った現実である。彼の精神状態が、そのまま表現されている。公園をじっさいに見るまえから、すでに嫌悪感を抱いているかのようなのである。彼が能動的に見る都市はそのようなものでしかない。ホールデンの心は閉ざされている。

それがもっと究極的にまで行きつくとき、次のような表現になる。これは、やはりサリンジャーの“De Daumier-Smith's Blue Period”における、スミスのニューヨークに対するむき出しの感情である。この直前に、バスの中での乗客とのいざこざがある。

Things got much worse. One afternoon, a week or so

---

later, as I was coming out of the Ritz Hotel, where Bobby and I were indefinitely stopping, it seemed to me that all the seats from all the buses in New York had been unscrewed and taken out and set up in the street, Where a monstrous game of Musical Chairs was in full swing. I think I might have been willing to join the game if I had been granted a special dispensation from the Church of Manhattan guaranteeing that all the other players would remain respectfully standing till I was seated. When it became clear that nothing of the kind was forthcoming, I took more direct action. I prayed for the city to be cleared of people, for the gift of being alone--a-l-o-n-e: which is the one New York prayer that rarely gets lost or delayed in channels, and in no time at all everything I touched turned to solid loneliness<sup>(7)</sup>

「事態はさらに悪化した。それから一週間かそこらたったある午後、ボビーと私が無期限で滞在していたリッツ・ホテルから出てきた時、ニューヨークの全てのバスの座席が取りはずされ、外に出されて道路に並べられ、そこでイス取りゲームが盛んに行われているような感じにおそわれた。もし私が席につくまで、ほかのゲームの参加者がみんなうやうやしく立って待っているということを、マンハッタン教会が保証して認めてくれたら、私も喜んでこのゲームに加わっていたかもしれないと思う。しかし、そのようなことが何ひとつ起こらないとわかると、私はもっと積極的な行動をとった。この街から人間が一掃されるように、ひとりで一・と・り・で一いられるという贈り物がもらえるように祈ったのである。それこそ、その途中でなくなってしまうたり、遅れたりすることのまれな、唯一のニューヨークの祈りなのである。私が手にふれるものは、すべて孤独そのものと化した。」

ここにとりあげた両者、とくにホールデンは、ニューヨークを彷徨しながら、じつは自分の内部にのみ目を向けている。そして彼は、あるいは西部の牧場に行きたいといい、あるいはライ麦畑の cather になりたいとい

う。だが、彼がニューヨークで辛うじて「自己」を支えるためには、「道化」の姿をかりるよりほかにはなかった。さまざまな滑稽な行為をすることによって、自らの純粋な部分を保護していたのである。この場合、道化を演ずることは彼の防御手段であったのだろう。

V

「道化」とは、一言でいうなら、世界を徹底的に対象化し、相対化していくものである。山口昌男は「道化的世界」の中で、「道化」を次のように定義づけている<sup>(8)</sup>。

(1)ある人々には、道化は我々自身の恐怖と不安の手近な標的である。つまり、道化をスケープゴートとして見る。ユダヤ世界のシュレミールはこの機能を意識した表現である。

(2)ある人々には、道化は人間が本当は不合理な土くれであることを示す媒体である。

(3)他の人々には、道化は、我々が物理的な法則と社会的礼節の檻の中に永遠に閉じこめられるのを、かたくなに人間らしく御免こうむることを、明らかにする。

(4)道化は、無意識の世界の使者である。

(5)道化は、混沌の淵の断涯に導くことで我々に、本源的な生の感情を蘇らせる。

(6)道化は意識の境界に立つ、彼は、意識が一つの領域から他の領域に切り換えることを助ける媒介者的存在である。

(7)道化を通して人は、捨てられ、忘れられ、無価値とされて来たものに意味を見出す術を学ぶ。

(8)道化は人を効用性、時間の支配する世界の奴隷状態からの離脱を助ける。

(9)道化は純粹遊戯の精神の化身である。

---

(10)道化は生の多様性へ人を開眼させる。

(11)道化は、否定的要素を再統合することを助け、最大の否定である死に立ち向かって、これを手馴ずける術を人に示す。

(12)死に直面して、日常生活の厳格にみえる価値、矛盾を拒否する思考が無力なことを自覚させ、笑い、遊戯、肉体を通じて、生の世界の根本的矛盾を克服する道を示す。

ここでは、道化の多様性について述べられているわけだが、彼はさらに次のように言う。

「その置かれた歴史的・文化的位置の故にユダヤ人達は、長い間、自らを戯画化する技術を身につけて来た。彼らが置かれた社会におけるマージナルな価値と酷薄な生活の故に、彼らはいやがおうでも自らの生活を距離をもって見つめる知恵又は技術を身につけざるをえなかった。この現実を仮構のものと見なし、歴史的現実の中で思わず本気になって身をのり出す人間の姿態を誇張して相対化するのは、この現実を克服する手段として最も頼りになる方法であった<sup>(8)</sup>。」

そして、ユダヤ的道化の原点といわれているのが、よく知られている Adelbert von Chamisso (1781~1838) の “Peter Schlemihls wundersame Geschichte” (1814) 「影を売った男—ペーター・シュレミール」である。

主人公ペーター・シュレミールはふとした偶然で、自分の影を、「やせて、骨ばって、ひょろ長い」、「灰色の服を着た」「中年の男」に、いくらでも金貨をとり出せる魔法の財布と引きかえに売ってしまう。しかし、とたんに影のない男の悲しさを味わうことになる。

「やがて再び我に帰ると、僕はもう何の用もないはずのこの場所を急いで立ち去ることにした。まづポケットに金貨を詰めて、それから財布の紐をしっかりと頸に結び、財布そのものは胸に隠した。僕は人目にふれ

ないやうに庭園から脱けだし、国道に出て、町へ行く路をとった。もの思ひにふけりながら城門の方へ向って行くと、うしろから『お若い方！もし、お若い方、と言ったら！』と呼ぶ声があった。——振りかへると、一人の婆さんがうしろから僕にかう呼びかけた、『旦那ったら氣をつけなくちゃいけませんよ、御自分の影を失くしてさ。』——『ありがと、お婆さん！』親切な忠告のお礼にと僕は婆さんに金貨を一枚投げ与へて、それから樹かげへ歩み寄った。

城門まで来ると、今度はさっそく見張りの番兵から『貴公はどこへ影を置いてこられた？』と訊かれるし、その又すぐあとでは二、三人のかみさんから『あれまあ、この人ったら影がないよ』と言はれた。これで僕はすっかり腐ってしまい、それからはうんと氣をつけて日向に出ないようにした。しかし、どこでもそう行くとは限らないもので、例へばあの、初めて突っ切りねばならなかった広小路など、それが又あひにくと男の子どもが学校から帰る時刻ときている。今でもあいつの姿は目に見えるやうだが、憎らしいせむしの餓鬼が僕に影の失いことを忽ち見てとって、大声を挙げて場末の文学小僧どもに僕のことを言いつけた。するところいつらが皆して、さっそく僕の論評を始め、泥を投げたりしたものだ。曰く、『ちゃんとした人間なら日向へ出るときは、影を持参するにきまってるあ。』僕は奴らから身を守るために、金貨を一杯つかんでは投げ、つかんでは投げた。そして情深い人々の助けを受けて、一台の貨馬車に跳び乗った。

走り行く馬車のなかにひとりきりになるや僕はさめざめと泣き出した。この世で功績や徳行よりも黄金が重きをなしていると同程度に、その黄金よりも影は高しとされているのではなからうか、というような予感がもう僕の心に起るのであった。以前は良心のため富など犠牲にしてしまったのに、今は単なる黄金のため影を投げ棄ててしまったのだ。これから僕は一体どうなる身か、どうなる運命か！<sup>(9)</sup>

このような後悔もすでにおそく、シュレミールは影のないという事実の

ために、数奇な一生をたどることになる。もちろん、魔法の財布のおかげでぜいたくな生活はできるが、それとても空しい。ついにはその財布さえも投げ捨て、全てを失ったときに彼はかえって冷静になり、偶然に手に入れた「七里の靴」によって、全世界の大自然を探索して心慰めるようになる。こうしてこの不思議は物語は、次のような忠告で終りとなる。

「ところで君も、わが友よ、人間たちにまじって生きて行かうといふなら、第一に影を、然るのち金を、尊重することを学びたまへ。もし君が君の為にのみ、君のよりよき自己の為にのみ、生きようといふなら、おゝ、君は何の忠告をも必要としない<sup>(10)</sup>。」

また、シュレミールという名前については、作者は兄にあてた書翰の中で説明している。

「シュレミール Schlemihl もしくは Schiemiel (この方が正しい) これはヘブライ語の人名で、Gottlieb とか Theophil とか、つまり、aimé de Dieu の意です。これはユダヤ人の日常語に於いて、この世で何をやっても成功しない不器用な人、もしくは不幸な人を、名指すものです。シュレミールはチョコッキのポケットに手を入れれば指を折るし、転んで引っくり返るし、鼻ばしらをぶつけるし、しょっちゅう不運な目にあふのです<sup>(11)</sup>。」

## VI

もちろん、シュレミール型道化は、道化のひとつのタイプにすぎないが、「不幸な、不運な、不器用な人」というと、すぐに、マラマッドの描くニューヨークスラム街の貧しい人々を思い浮かべてしまう。あるいは、それは、ペローの小説のインテリでもいい。アメリカの夢、ベトナム戦争などに象徴される力の信仰、現代の産業主義、それらが道化によって撃たれる。

都市は混沌とした闇であり、道化はその闇にあえて身を寄せることによって、世界の全てを把握する。彷徨を強いられ、いわば影の部分で生きてきたユダヤ人は、生き残るための手段のひとつとして道化を演じてきた。都市という闇に「優しさ」を見い出すことも可能であるが、彼らが闇の優しさを求めざるをえなかったことは二重の悲劇であろう。

今や、「真実とは何か」と問うことが真実であるように、「アメリカとは何か」と問うことがアメリカであり、現代を問うことにほかならない。

#### Notes

- (1) 中村稔「詩・日常のさいはての領域」創樹社1976, p. 13.
- (2) Ihab Hassan, "Radical Innocence" 「根源的な無垢」岩元巖訳, 新潮社, 1972.
- (3) 安部公房「内なる辺境」中央公論社, 1971:
- (4) 安部公房「地球の虫食い穴への旅」朝日新聞夕刊, 日付不明。
- (5) J.D. Salinger, "The Catcher in the Rye" (Penguin Books, 1951) p. 124.
- (6) J.D. Salinger, "Nine Stories" (Bantam Books, 1953) p. 131-2.
- (7) 山口昌男「道化的世界」筑摩書房。1975, p. 270-2.
- (8) *Ibid.* p. 263.
- (9) Adelbert von Chamisso, "Peter Schlemihls wundersame Geschichte" 「影を売った男」大野俊一訳, 森開社, 1976, p. 15-7.
- (10) *Ibid.*, p. 85-6.
- (11) *Ibid.*, p. 102.